

「学校を核とした地域づくりによる地域コミュニティの持続」成果報告書

1. 概要

■大学名

国立大学法人 島根大学

■教育研究活動

区分：その他（地域コミュニティの持続）

テーマ：学校を核とした地域づくりによる地域コミュニティの持続

■連携した市町

島根県邑南町

■連携した企業、団体等

日貫地区自治協議会

■参加学生

教育学部	4年	1名
	3年	3名
	2年	3名
	1年	15名
	合計	22名

2. 活動の目的

広島広域都市圏を構成する邑南町では、人口減少と少子化により極めて小規模な小学校が存在しており、その存続が危ぶまれている。地区単位で存在している小学校は、地域においてはなくてはならない存在であり、今後は小学校と地区が一体となって地域コミュニティを持続させる必要がある。そこで、本学教育学部学生が小学校と地区の双方に関わることにより、学校を核とした地域づくりに関する具体的方策を模索する。その結果、得られた知見に基づき、今後における地域コミュニティのあるべき姿を明らかにすることを目的とする。

3 活動の内容

(1) アンケート調査

邑南町日貫地区住民を対象とした日貫小学校に対する意識、日貫小学校と地域との結びつき、日貫地区の住み心地等について、アンケート調査を実施した。アンケートは、11月下旬に日貫地区自治協議会を通じて日貫地区全世帯に対して配布し、12月15日（日）を締切として郵送により回収した。その結果、100世帯から回答があった。回答の結果についてはデータ入力を行い、図表化等を行った。

調査の結果、日貫地区住民にとって日貫小学校は地域において「なくてはならない」存在としての認識が高いことが確認された。一方で、今後も児童数の増加が期待できないため、統廃合等により地区内から小学校がなくなることに対しては「やむを得ない」と認識する世帯が多くあった。

なお、アンケート調査の結果については、今後も引き続き分析を行い、令和7年度に日貫地区自治協議会に対して報告を行う予定である。

(2) 地域資源発掘フィールドワーク

「人文地理学概説Ⅰ」の受講生 22 名が、11 月 3 日に邑南町日貫地区へ訪問し、地域資源発掘のフィールドワークを行った。当日は、2 つの班に分かれ、住民による案内で日貫中央自治会内の範囲を徒歩で巡った。また、午後は日貫公民館においてワークショップと成果発表会を実施した。活動成果については、「邑南町日貫地区の魅力と可能性」（人文地理学教育・研究叢書 75、162 ページ）として発刊した。



(3) 学生による日貫地区滞在

学生 1 名が 10 月 23 日（水）から 11 月 4 日（月）に日貫地区に滞在し、地域づくりの実態を把握するとともに、日貫小学校における地域との関わり状況を把握し、学校を核とした地域づくりの可能性を模索した。期間中、平日は日貫小学校に赴き、授業見学、学習支援、校務体験などを行った。また、平日夜間及び休日は、神楽練習参加、自治会会合参加、町イベント参加等を通して、地域実態の把握に努めた。



(4) 報告会の開催

2月22日（土）に邑南町日貫地区で報告会を実施し、地域住民および学校関係者との意見交換を行った。島根大学より5名の報告者（授業受講者）と6名の学生が出席し、地域住民・邑南町役場職員が約20名参加した。

○プログラム 司会：伊藤美結（教育学部社会科教育専攻3年）

10：30 開会挨拶 作野広和（教育学部社会科教育専攻教授）

10：40 体験報告 泉 海斗（教育学部社会科教育専攻3年） 「日貫地区に滞在して」

11：00 学生報告

(1) 尾添誠仁（教育学部社会科教育専攻1年） 「島根版スイス!? 自然溢れる「日貫」

(2) 藤田翔伍（教育学部社会科教育専攻1年） 「住みたい日貫地区を目指して」

(3) 大石将輝（教育学部社会科教育専攻1年） 「日貫地区の農業を盛り上げる」

(4) 内坂一葉（教育学部社会科教育専攻1年） 「日貫地区における神社・仏閣とその活用」

11：50 コメント 一般社団法人 弥禮 徳田秀嗣さん

11：55 閉会挨拶 日貫公民館 館長 森田 修さん

12：00 閉会



4 活動の効果

(1) 学生によるコミュニケーション能力の深化

学生が現地に訪問・現地滞在することで、地域実態を把握するスキルや地域・学校関係者とのコミュニケーションを深化させることができた。

(2) 学生による地域課題発見能力の育成

本事業により、地域及び学校に関する課題を事例的に把握することで、邑南町内の全地区（12 地区）において水平展開するための基礎資料の作成や、地域住民に対する向き合い方に関するノウハウが蓄積された。

(3) 地域住民の意識変革

地域住民及び学校関係者が学生と対応・交流することで、地元住民とは異なる価値観に接することができ、ローカル・イノベーションを起こす素地が形成された。

【事業効果総括】

学生が邑南町を訪問・滞在することにより、地域住民や学校関係者との接し方を学ぶとともに、地域課題を発見し、解決しようとする力を育成することができた。また、地域活動等に参画することにより、自らが地域課題解決の主体者として考え、行動することができる人材を育成することができた。

5 事業を終えての考察

(1) 事業の意義

学生が短期（1 日）及び長期（2 週間）にわたって日貫地区に訪問・滞在することで、地域住民とのコミュニケーションを密にすることができた。これにより、地域において学生・教員に対する信頼を獲得することで、研究成果を地域づくりに対し確実に活かせる素地ができたと考える。

また、教育学部として本事業を行うことにより、学校教育と地域づくりの双方に対して多くの知見を蓄積できたと考える。とりわけ、「学校を核とした地域づくり」に関しては、これまで社会教育学を中心に検討が行われてきたが、従来の研究においては地域からのアプローチは弱かった。本事業を実施したことにより、地域の実態を的確に把握し、地域に寄り添った活動を実行することができた。

(2) 事業成果の普及

邑南町においては、今後における教育のあり方や学校配置のあり方を検討する予定である。日貫地区において本事業を展開することにより、邑南町全体のモデルとして水平展開することが期待される。また、同様の課題は広島広域都市圏における中山間地域で共通してみられるため、研究成果は他自治体にも参考になるとと思われる。

(3) 課題

邑南町は、公共交通機関を利用して訪問することが極めて困難であるため、学生たちのみで自主的に邑南町に訪問することは難しい。そのため、活動の継続性をどう担保するのが大きな課題となる。可能であれば、本事業を来年度も申請することで事業費を確保し、学生の訪問や滞在の経費に充てたいと考える。